地方都市中心市街地における寺院境内の再構築
—浄土真宗大谷派金沢別院境内をモデルとした学習・療養空間の設計—

A Reconstruction of Precincts of Buddhist Temples at City Centers in Local Cities
–A Design of Jodo Shinshu Otani-ha Kanazawa Betsuin Temple in Learning and Recuperation

指導：佐藤光彦 教授　　M9060　森本栄貴

fig.1 鳥瞰イメージ

0. はじめに

寺院は本来、地域コミュニティ・センターとしての役割を担い、集会・教育・医療の社会的・文化的に複合した機能を有しており、寺院の空間もそれに対応して高い開放性を備えていた。また、官に対して独立性を有する場所であり、境内で興行を行うなど多様な活動が行われ、民衆に親しまれ、集まり、賑わい、安らぐといったコミュニティの場であった。

現在では、寺院建築は外観としての様式のみが継承され建替えが行われている場合が多いが、現代の宗教活動に対応した寺院境内はどのような姿であるべきなのだろうか。

1. 計画の背景

1-1. 寺院の現状

寺院は葬儀のみが残り今日まで持続していた。近年の「葬儀ホール」の普及により葬儀は葬儀場で行われるようになり、寺院は地域社会の中で空洞化した場所となっている。檀家制度が失われつつあるなか寺院を維持するために多様な活動を行う寺院が増えてきている。(*4,13)

1-2. 学習の場としての寺院活動事例 (*4)

・神宮寺 尋常浅間学校 (長野県松本市浅間温泉)
社会と直結する問題が多角的に取り上げられ、講演、対談、シンポジウム、コンサート、芝居、お祭りなどの形式で行われた。初回から 10 年間の 100 回までの参加者延べ人数は、43,000 人を数えた。隣接する「アパロホール (300 席) 1998 年」は　多目的ホールとして主会場となり、葬儀や法事の場となり、稼働率は高い。地域の人びとの集いに一役買うとともに、地域防災の拠点となり災害時の避難所に指定されてもいる。

・應典院 (大阪市天王寺区下寺町)
1997 年に再建。本堂ホールをはじめ、寺院の施設が活用され、さまざまな演劇やアート活動が行われている。檀家を持たず葬儀をせず年間約 50 本の演劇、10 本前後の映画、70 程度のワークショップが行われており年間 3 万人弱の人たちが集まる。事業の運営は NPO 団体により運営される。

fig.2 神宮寺 尋常浅間学校

fig3. 應典院

1-3. ビハーラ (仏教ホスピス) の展開と緩和ケアの課題

梵語の「ビハーラ」は「寺院」「病院」「安息処」「精舎」「僧院」の意味をもつ。寺院は伝統仏教の衰退という危機感の中で、緩和ケアを社会に切り込む突破口にしようと考え、各種の研究会を立ち上げ、ホスピス病棟での活動を行っている。(*4)

仏教ホスピスは多様な精神状態を自然に体現できることを保証することが重要と考えられ、社会との隔絶を断ち、開かれた施設とすることが求められている。機能と境界の曖昧さを作り利用者に選択と対人感触密度の大小に自由度を与える空間が必要とされている。(*2)

fig.4 あそかビハーラクリニック (2008) (左) 待合室 (右) あそかの間

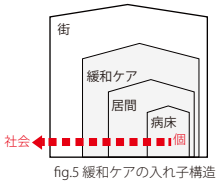
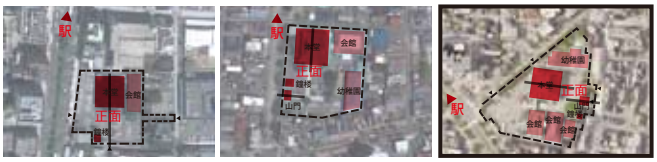


fig.5 緩和ケアの入れ子構造

1-4. 浄土真宗寺院の複合化と参道・軸を持たない境内

浄土真宗寺院は伽藍を持たず (*16) 本堂に伽藍が集約されている。本山の末寺として建立された別院の現在の寺院境内を考察すると、本堂・山門・鐘楼の三つから境内が構成されている。しかし、近代以降は本来は本堂で行われていた集会や学習の機能がユニット化され会館となり、幼稚園が境内で運営されるようになり現在の形式をとっている寺院が多い。

また、多くの寺院は市街地に位置し、鉄道の普及により街の正面が変わり、街の裏側に山門がある寺院が多く、火災での消失の際は山門を大通りに面して配置された大垣別院のような例もみられる。このように市街地における寺院境内の正面性が問題になっていると考えられる。



浄土真宗大谷派富山別院 (富山県)　浄土真宗大谷派大垣別院 (岐阜県)　浄土真宗大谷派金沢別院 (石川県)

fig.6 浄土真宗寺院境内の配置と駅との関係

1-5. 寺院の活動と市街地寺院の可能性

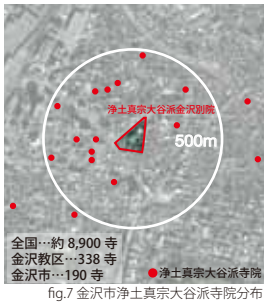


fig.7 金沢市浄土真宗大谷派寺院分布

金沢別院に教区教務所をおく浄土真宗寺院は 338 寺あり、金沢市内では 190 寺が町中に散在している。僧侶どおしの繋がりが強く金沢別院を拠点に「原発問題 / 部落問題 / ジェンダー / 終末期医療等」の幅広い勉強会や講演会を行っている。しかし境内の閉ざされた場所で行われていることから市民に認知されていない現状がある。

1-6. 大学の郊外化による市街地の学習施設の不足

fig.8 金沢市浄土真宗大谷派寺院分布

市街地に多くの寺院が位置しているのに対して、モータリゼーションにより大学施設の大半が郊外に位置し市街地での教育機能が不足していることがあげられる。各々の図書館では相互利用を図っているものの学習施設としての場所は少ない現状があり金沢市中心市街地も同様の状況であることがあげられる。

2. 計画の目的

寺院建築の現状は、寺院の外観としての様式を継承した増築や改修が多く行われており、現代の寺院の活動を満たす建築にはなっておらず、寺院建築を抜本的に再構築する必要があると考える。

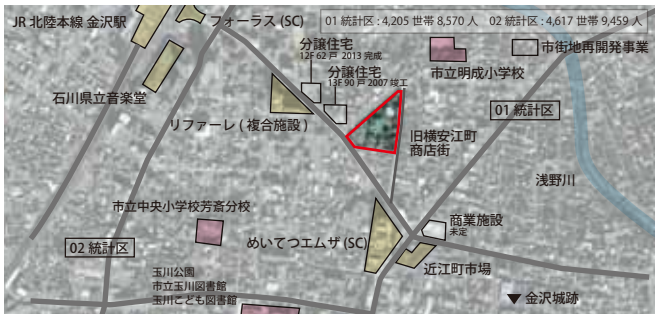
地方都市中心市街地に位置する寺院が、都市に対して空洞化している状況であることに対して、浄土真宗大谷派金沢別院を対象敷地とし、以下の 4 つを目的とし、現在の境内にある既存建築を再編成し、「学習・療養の場」としての寺院境内を再構築することで、現代における寺院境内の新しいモデルを提示する。以下を計画の目的とする。

1. 軸のある正面性をもつ寺院から、多方向からの求心性のある地域に開かれた HUB となる寺院とする。
2. 学習施設を設ける事で、地域的な学習コミュニティと宗教活動としての学習機能との相互関係を図る。
3. 寺院境内に緩和ケア機能を設けることで社会と関係をもてるビハーラ (仏教ホスピス) 空間を形成する。
4. 寺院建築の空間性を再解釈し現代の機能に対応した寺院境内の姿を探る。

3. 計画敷地
3-1. 浄土真宗大谷派金沢別院

所在：石川県金沢市安江町 15-52　竣工：1971 年　（山門… 1957 年）RC 造　銅板葺き　畳敷き

fig.9 浄土真宗大谷派金沢別院



・周辺敷地の現状
駅から徒歩数分に位置するも商店街は閑散としている。中心市街地の地価の下げ止まり、都心回帰の流れ等が共同住宅建設に拍車をかけたものと思われ、今後も都心軸沿線及びその後背地の商業地域におけるマンション建設の活発化、さらには、北陸新幹線開業等の要因から、この傾向が続いていくものと考えられる。(*14)

fig10. 敷地周辺状況

3-2. 境内の歴史と現在の本堂

金沢別院の創建は延元 4 年 (1337) 覚如上人が草庵を開いたのが始まりと伝えられ現在の金沢城跡地に建立された「御堂」が始まりである。織田信長の時代に一度は陥落するが、加賀藩主前田利家との和睦により再興する。慶長 16 年 (1611) から京都東本願寺を支持する門徒衆により現在の位置に御坊を建立し「東末寺」として再出発する。度重なる火災により 6 度焼失し、現在の寺院は昭和 46 年 (1971) に再建されたものである。

現在の本堂は RC 造ではあるが、以前の木造本堂を復元した本山の様式を踏襲した本堂 (fig.11) である。30m ある本堂は昭和の街の風景 (fig.12) として継承されており、境内には時代ごとに様々な機能を有していた (fig.13)。

願寺　fig.12 1955(昭和 30 年) の木造本堂　fig.13 明治 9 年に焼失した境内

3-3. 境内の現状と商店街の現状

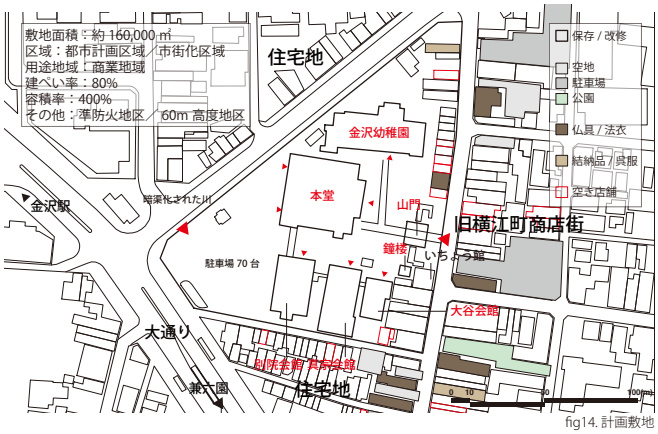


fig14. 計画敷地

既存建築面積　約 5,000 ㎡　既存延床面積　約 10,000 ㎡

- 本堂 (2F)　約 1,500 ㎡
  1F：本堂　B1：納骨堂／講堂／教室 (真宗学院 3 クラス)／講師室／図書館 / 倉庫等
- 別院会館 (3F)　約 1500 ㎡
  1F 別院事務室／食堂　2F 法務員室／控室／輪番室／法中室／3F 大広間／結婚式場 (30 人)
- 真宗会館 (2F)　約 1,000 ㎡
  1F：ホール／講師室／会議室　2F：応接室
  研修室／資料室／会議室／輪番所長室／納骨堂
- 大谷会館 (2F)　約 700 ㎡
  1F 金沢教務所／資料室／倉庫　2F 広間
- 幼稚園 (2F)　約 1400 ㎡
  保育室 7 クラス (115 名)／講堂 / 事務室
- いちょう館 (3F)　約 300 ㎡
  コミュニティーセンター：1F 商店街の休憩所
  2F 商店街事務所／会議室　3F ホール
- 仏具屋／商店 (2,3F)　約 2,000 ㎡

fig15. 境内建築データ

・裏側が街の正面にある本堂

金沢駅からの大通りの軸に対して本堂は裏側に位置する。現在は駐車場となっており、外周の門により閉ざされた場所となっている。市民の通過動線としも頻繁に利用されている。

・3 つの会館

3 つの会館は寺院の必要にあわせて順に異なる時期に建設されデザインは統一されておらずブリッジにより連結されている。近年では様々な用途での利用が増えているが閉鎖的な建築となっている。

・金沢幼稚園

学校法人 金沢幼稚園は、真宗大谷派金沢別院の関係幼稚園で大正 11 年に設立され、社団法人「大谷保育協会」に加盟（全国に約 500 園）する幼稚園である。寺院が運営をしており境内を利用した活動も行われている。

・門前町であった旧横安江町商店街

300 年前に金沢別院の門前町として始まり昭和 34 年にはアーケードが建設され興隆を極めた。昭和 60 年以降は香林坊地区の大型 SC に押され衰退してし平成 17 年にアーケードが撤去され「金澤表参道」として生まれ変わったものの閑散としている。

fig16. 敷地調査

4. 設計の概要
4-1. プログラム

<寺院境内>
保存　本堂 + 山門 + 鐘楼 (既存伽藍)
既存伽藍を保存すると共に、
活動の多様化に対応したプログラム構成
(新規伽藍)
建替　+ 会館 + 真宗学院
+ 幼稚園
+ 商店街一部
現代において、宗教活動に対応したものとして
付加　+ 学習機能 + 緩和ケア

fig17. 保存 / 立替 / 付加

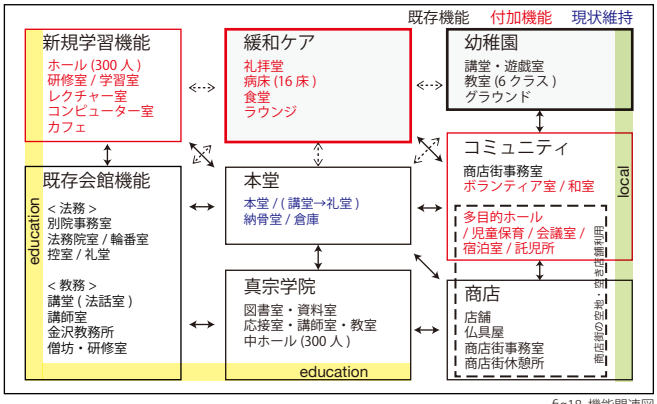


fig18. 機能関連図

4-2. 本堂の改修・減築

地下の教室・図書館・講堂は境内に新設し、礼堂・納骨堂・設備室を整備する。また、二層屋根の壁を減築し、二重屋根内部を光の層とすることで参拝空間としての外陣を季節や時間によって光量の異なる環境とする。

縁側部分は拡張し、本堂の周囲を囲み他施設と 2 階 (GL+3000) レベルで接続することで本堂に求心性をもたせ回遊性のある寺院境内を構築する。

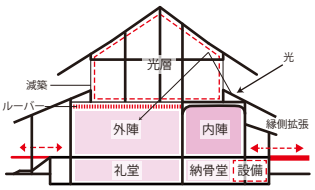


fig.19 本堂改修

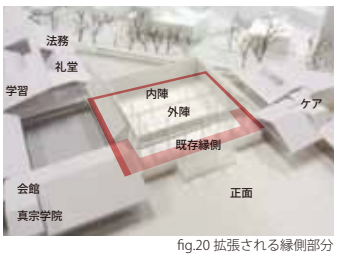


fig.20 拡張される縁側部分

fig.21 季節と時間によって変化する外陣

fig.22　縁側の連続

4-3. 不整形な市松配置・寺院空地の分割・シークエンス

fig.23 配置計画

本堂を中心に市松状に配置することで４面にファサードを持つ伽藍を形成し、本堂との調和を図る。周辺環境との関係を考え機能を配置し、それぞれの伽藍に対応した性格の異なる空地とし、多方向からのアプローチを可能とする。雁行する配置により出隅入隅が繰り返され、外部空間との関係性をつくる。

4-4. 十字プランと曲面による境内空地の相互関係

本堂の柱を連続し「間」をつくる十字プランに加え、曲線を用いる事で、互いの境内空地に関係をつくる (fig.26)。

幼稚園と緩和ケアがバッファーをかえして関係をつくることで緩和ケアの患者にとって、子どもの活発な活動を感じることができる中庭を形成する。

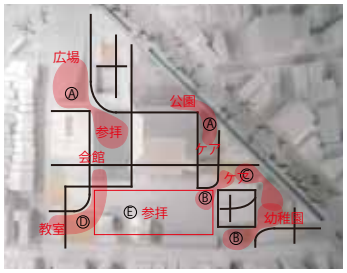


fig.24 境内空地の関係

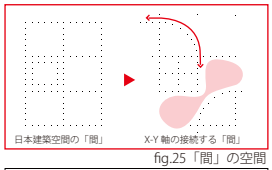


fig.25「間」の空間

A. 空地の連続
B. 視線のみの関係
C. バッファーをかえして関係
D. 境内空地を内部に取り込む
E. 本堂正面の参拝空間の形成

fig.26 境内空地関係の分類

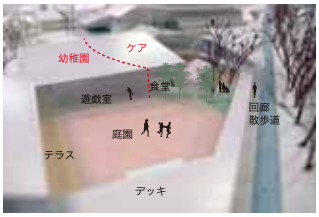


fig.27　C. バッファーをかえして関係

fig.28 外部環境を取り込んだケアの病床

4-5. 大屋根による伽藍計画

敷地を大屋根で覆うことで、屋根の下は周囲と連続する半屋外の空間となり境内全体が自然環境のような場所となる。新しい屋根の建築は、本堂と溶け込み、新しい寺院風景を生みだす。日本建築の「縋破風」の複数の屋根をつなげるように本堂から会館・その他施設から町屋と連続する風景をつくり、境内のプログラムが溶け出すように外部と関係を持つ。

fig.29 駅前正面道路からの敷地全体に屋根がかかる風景

4-6. 廻廊による動線計画と領域を形成

敷地外周に廻廊をまわすことで、街に対して大屋根で覆われた寺院境内の領域を形成する。それぞれの伽藍をつなぎ、荘厳さを感じられる閉鎖感のある境内空地をつくる。

fig.30 外周の廻廊

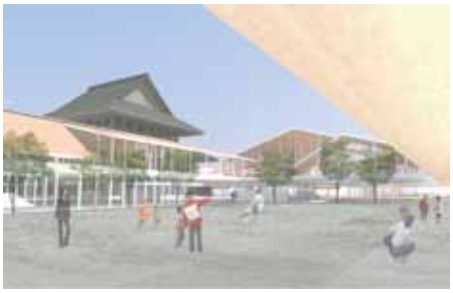


fig.31 大きな屋根がつくる領域

4-7. 廻廊の拡張により商店街との関係をつくる

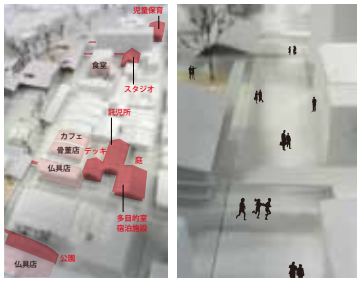


fig.32 商店街の空地を利用したコミュニティセンター

寺院境内の回廊を拡張し商店街の空地を利用し点在する離散型コミュニティセンターを計画する。隣接する店舗と関係をつくりながら市松状に空地を設けて配置することで、境内と連続した空地のある環境の良い街並を形成していく。

4-8. 構造体としての屋根／ファサード

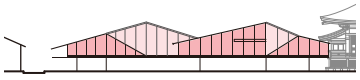


fig.33 構造体としての屋根

fig.34 2 階床と屋根による構造体内部の空間

２階の床と屋根を構造体として屋根を浮かすことで GL 部分はフレキシブルで、サスティナビリティーを持ち、寺院の状況に応じて数十年後、部屋自体をしつらえなおせることを可能とする。

軽々と浮く屋根の中は繊細な柱による多様な「間」の空間となり、外部と内部の曖昧なインターフェイスをつくる。

4-9. 分節する屋根がつくる寺院環境

緩やかに屋根が分節されることで様々な領域をつくり外部と内部、内部空間でのお互いの距離感をデザインする。多様な屋根形状はスラブとの関係により様々な環境をつくり寺院建築に閉鎖性を持たせ、内部空間を分割すると共に、屋根の内部と外部空間との関係をコントロールする役割となり設備的な役割も果たす。

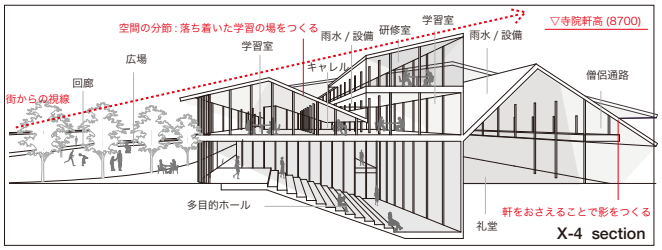


fig.35 学習空間の断面計画

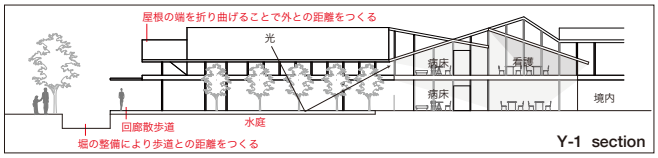


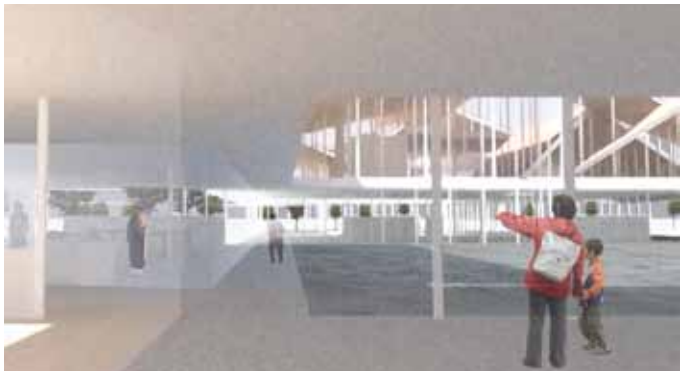
fig.36 緩和ケア空間の断面計画

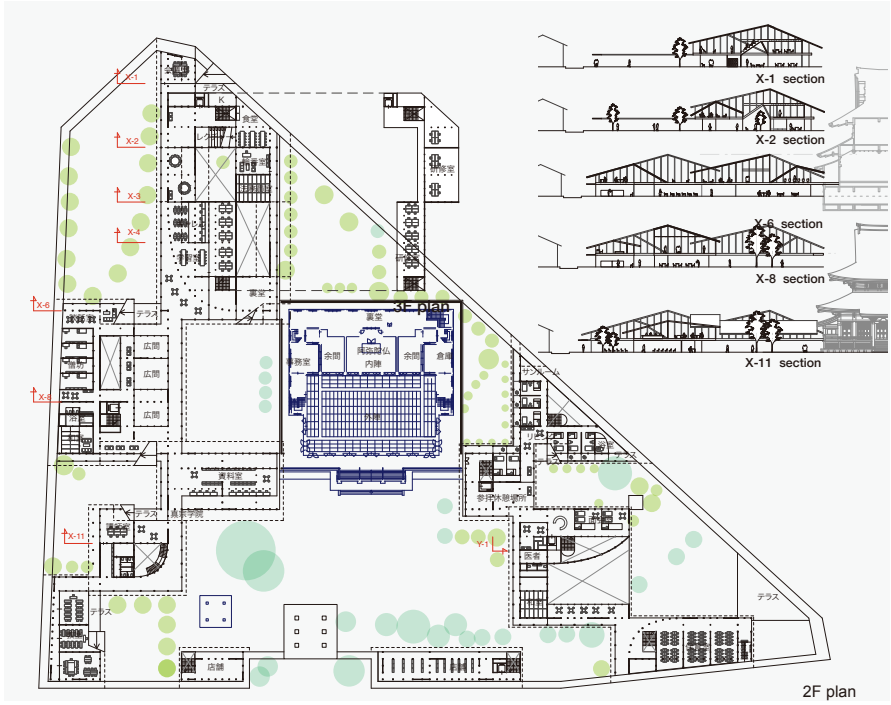
5. まとめ

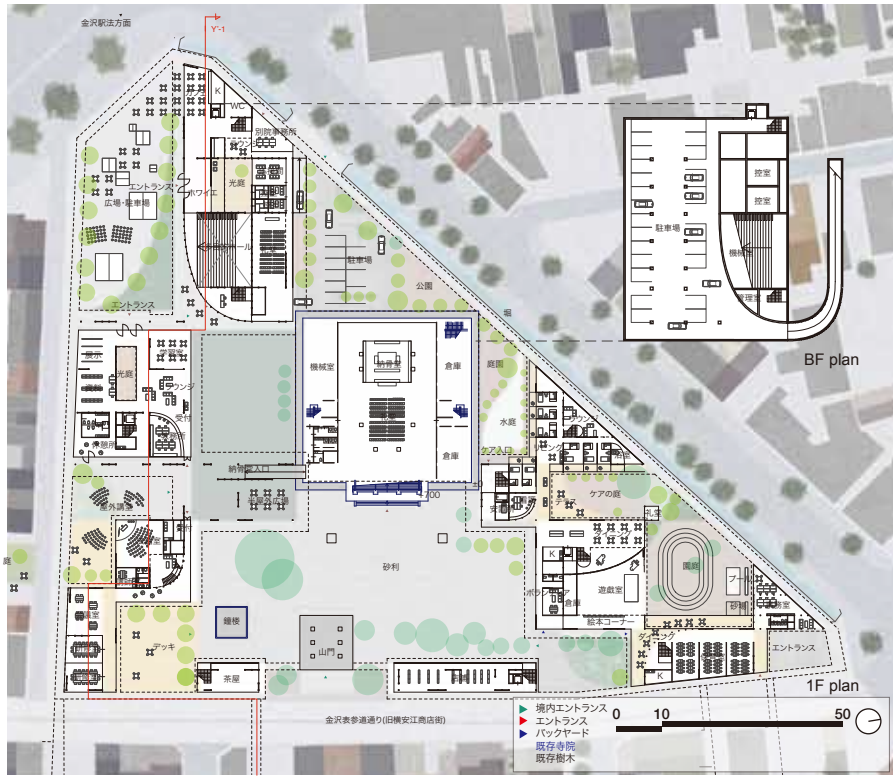
fig.37 屋根勾配により閉鎖性をもつ僧坊と学習空間の関係

屋根と柱の形態により境内と外の関係・内外の関係・内部空間同士の関係をコントロールすることで宗教空間のもつ閉鎖性と地域に開かれた開放性を併せもつ新しい公共空間としての寺院境内を再構築した。

＜参考文献・資料＞
*1『ホスピス・緩和ケアのための環境デザイン』松本啓俊・竹宮健司　鹿島出版　／　*2『長岡医療と福祉の里 ビハーラ - 仏教ホスピス - 計画』菅野実・小野田孝明他　東北大学建築学報 第 28 号　／　*3『がんばれ仏教！お寺ルネサンスの時代』上田紀行　NHK ブックス　／　*4『寺よ、変われ』高橋卓志　岩波新書　／　*5『仏教とビハーラ運動 死生学入門』田代俊孝　法蔵館　／　*6『「ビハーラ」の提唱と展開』田宮仁　学文社　／　*7『日本の近代建築（上・下）』藤森照信　岩波新書　／　*8『近代の神々と建築』五十嵐太郎　廣済堂出版　／　*9『建築設計資料集 73 寺院建築』建築思潮研究所　建築資料研社　／　*10『京都仏教青年会活動報告「医療における仏教のニーズについて」』名倉道隆　／　*11『東本願寺の至宝展―両道再建の歴史―』東本願寺　／　*12『真宗道場から寺院へ、仏壇へ』同朋大学研究所　／　*13『宗教年鑑　平成２０年版』文化庁　／　*14『金沢市中心市街地活性化基本計画』石川県 金沢市　平成 19 年 5 月　／　*15『建築家の作品に見る現代仏教寺院の性格』　丸井堂嗣ほか　／　*16『浄土真宗寺院の建築史的研究』　櫻井敏雄　法政大学出版局刊　／　*17『間（ま）・日本建築の意匠』神代雄一郎　鹿島出版者　／　*18『日本の建築』吉田鉄郎　鹿島出版会




X-1 section
X-2 section
X-6 section
X-8 section
X-11 section
3F plan
2F plan


金沢駅方面
BF plan
1F plan
金沢表参道通り(旧横安江商店街)
境内エントランス
エントランス
バックヤード
既存寺院
既存樹木
0
10
50